

「もの」と「こと」.. 痕跡から行為・認識へ

藤原哲・上野祥史・中村耕作

三上 講演に続きまして、藤原さん、上野さん、それから中村耕作准教授の3名による鼎談を行います。舞台の準備をいたしますので、しばしお待ちください。

お待たせいたしました。これまで鼎談を始めたいと思います。それでは、よろしく願います。

中村 皆さん、こんにちは。三年前に歴博に着任しました、縄文時代を担当しております中村と申します。総研大については今年度からですが、先ほどのお二人のお話を非常に歴博らしいお話だと聞いておりました。最後に上野さんが、今日のポスターになっている古墳時代と中世の甲冑の写真を出され、「比較」という観点を提示されました。

今日はこんなに多くの方に集まっていただけとは思っていませんでした。戦争というテーマも関心を集めていることかもしれません。考古学というと非常に古い時代の話のように思われがちですが、先ほどの「比較」という観点を通じて、我々も現代的なテーマに関わっています。

私が最初に歴博に出会ったのは、一九九六年、中学生の時の『倭国乱る』という展示でありました。展示解説のあとに佐原先生のサイン会がありました。この図録はその自慢するために持ってきたのではなくて、表紙はタイトル通り、弥生の戦士（復元模型）ですが、めくるといきなり学徒動員の写真が出てきます。次をめくると、今度は大阪の夏の陣の絵が出てきます。様々な分野の論考も載っていて、例えば城郭研究で有名な千田嘉博先生が歴博にいらっしゃったとき、弥生と戦国の戦い、あるいは城について比較をするというような論考を書かれています。

そういう、様々な分野からのアプローチ、関連するものを比較すること、これは佐原先生の学問の特徴でもあります。私にとっては歴博自体の大きなイメージとしてあったわけです。まさに今日、藤原さんのメインテーマは弥生、古墳ということでしたが、しかし、それにどう迫っていくかという話の中では非常にさまざまな地域、時期の戦いについての資料を使うということをされています。上野さんも、今日は弥生、古墳の話が中心でしたけれども、中国のこともやっていらっしゃっていますし、お話の中では中米の話も出てきました。

さて、藤原さんのお話しの最後に、歴博の思い出というスライドがありました。改めて、歴博で先生たちからどのようなことを学んだのか、あるいは先生でなくとも歴博という場でどういうことを学ばれたのか、そのあたりからお伺いしたいと思います。

藤原 先ほどお話しにあった『倭国乱る』は私も非常に懐かしい展示で、図録については何度も読み返したことを思い出します。内容が濃くて古代日本のみならず、古い石器時代から中世までの「戦い」や、世界史や人類学的知見が含まれていて視野が広いですね。私が総研大に在学中もいろいろな研究会に参加させて頂きましたが、学際的な研究の総合、という視点の大きさが歴博や総研大の魅力の一つかな、と思います。

私の個人的な思い出に戻りますと、総研大では最初、広瀬和雄先生のご指導を受けていました。というのも、広瀬先生は過去に大阪府教育委員会に在籍されていて、私も大阪で発掘をしていたので個人的な面識があったのです。その広瀬先生を頼って総研大に入学した、という感じですね。実は、私が考古学を始めるきっかけは、近所の池上遺跡という弥生集落の発掘でした。ですから大学の頃は弥生の集落を専門にしていたのです。広瀬先生には優れた弥生研究もあるのですが、やはり中心となるのは古墳の研究で、総研大での講義後の雑談はいつも、古墳の魅力を延々と話されていました。そうした面白い話に加え、休日に関東を中心として古墳見学に連れて行ってもらったことが、私的にはすごく古墳時代の社会像をイメージする上での勉強になったなあ、と実感しています。

それから、私が総研大に在学していた時期は藤尾慎一郎先生や坂本稔先生などが放射性炭素年代を中心に弥生時代の新しい年代研究を深化させておられました。そのため総研大の講義でも、放射性炭素年代の基礎から応用まで、文字通り一から教えて頂いたことも大きな財産になっています。また古代史の仁藤敦史先生には文献資料の解釈などについて丁寧に教えて頂きましたが、

当時の私のように社会人で地方公共団体の発掘に携わっている身では、なかなかこれらの最先端の研究に接する機会がありませんから、大変にありがたかったです。

広瀬先生が退官されたあとに指導していただいた上野先生に関しては、正直なところを言うとも最初はすごく怖かった（笑）。何が怖かったかというと、上野先生はものすごく冷静で理論的でした。私は何となく感覚で生きてきたので、先生から理論的に議論を詰められると、ぐうの音もでないで降参してしまったのです。しかし、上野先生のそうした指導のおかげで、それまで何となく考えていたことが理論的に整理され、最終的に博士論文として結実することができたといえます。一時期は博士論文がまとまらず、総研大を休学して退学するかと悩んでいたのですが、無事に総研大を卒業できたのは上野先生のお陰です。

あとは、博士論文の審査の際に、戦争がテーマの割には日本以外の研究成果がほとんど参照されていない、という指摘を受けたことも広い視野をもつ総研大ならではの感じました。確かに言われてみればその通りだと思って、総研大卒業後は意識的に海外の戦争研究にも目を通すように努めました。すると、これまでとは別の課題や視点がみえてきて、卒業後に「縄文時代の争い」や「部族ゾーン理論を応用した戦争研究」といった新しい研究テーマに着手することができました。

あれもこれも含めて振り返ると、総研大の最大の思い出は「研究が楽しい」ことを実感できたことです。それは最先端の様々な分野の研究に接することができた賜物なのですが、それまでの私は楽しい発掘の仕事に満足していただけですが、総研大に入学したお陰で、発掘だけではなく

く、研究そのものも大変に面白いのだ、と実感することができました。

中村 ありがとうございます。いまのお話を受けて上野さん、いかがですか。

上野 怖いと言われてしまって(笑)、どう続けようかなと思いますが、先ほど私は講演のところでお話をしたのですが、藤原さんはもともと広瀬先生のご指導をということで入ってこられた。もちろん私も総研大の教員として支援、助言、提言をしてきたわけですが、先ほどお話をしましたように、大学院博士課程ですので、こうしなさいとか、こうするべきでしょうというのは実はないんです。ご本人が思っておられることをいかにオリジナリティを出しながら研ぎ澄ましていくかというところを、われわれ教員は、いわば助言、提言をするということになります。

そのときに、藤原さんは世代的にも近いわけですが、戦争とか殺傷人骨、戦いという研究の蓄積をおもちでした。もちろん専門家としてそれを積み上げていくことはできるのですが、ただ、博士論文ということになると、その人の研究のオリジナリティ、独創性というものがあるのかというの、やっぱり明確にしないといけない。そのときに藤原さんが取り組んでいること、ご自身として一番ここは譲りたくない、まわりに有無を言わせないと、どう出せるかが重要になります。私はあえて古墳、弥生ではなく、藤原さんの考えている物事をほかにも通用できるようなものの見方を探る、そういう議論を重ねてきました。

ご著書は同成社から単著でお出しになっているので、今日のお話がいろいろ出ていると思います。関心のある方はご覧いただければと思います。それに付随して、先ほど司会の中村先生からお話があったところをちょっと開いていくと、なぜ私がそういう指導というか、助言、提言をし

ていたのかというと、研究は世代によって着眼点が変わってきます。中村さんがご紹介された『倭国乱る』、もとなる戦争の共同研究を牽引されたのは佐原真先生ですが、戦争を体験された世代の先生です。その世代が世間を担っていく、学界をリードしていくといったときに、なぜ人は争うのかというのは、その経験、あるいは自分たちの認識の中でどう評価をしていくのかというのを議論されてきたのかと思います。

今日の藤原さんの話の中で古墳時代に戦争あったか、なかったかみたいな話があったと思いますが、それは次の世代が、古墳時代の戦争、戦闘をどう捉えていくかという一つのモードだったと思います。藤原さんはその「次の世代」に当たるわけですが、では、その「次の世代」なら、戦争や戦闘、あるいは社会変遷、社会変革というものを、どう武器、武装から捉えていくかといったときに、過去のものをなぞるだけでは限界が来てしまう。要は新しいモード、新しいモードで研究というのはある意味、革新をしていかないと、結局、限界点が来てしまう。先ほどの戦争、闘争、殺傷人骨は非常に精緻なものがあるのですが、それを集約していくときに、過去の捉え方では藤原さんのオリジナリティはなかなか出せないだろうと。

そこで、たぶんかなりしんどい、つらいところもあったと思いますが、ご自身として誰にすることができなく、誰に何を言われても自分はいくなんだと言えるところをお探しになったということであったかと思えます。『倭国乱る』、それから次の世代の松木武彦先生などのモードがある。そして今を牽引する世代が自分たちをどう革新し、つくっていくのか、そういうお手伝いをしたというようなところをお話したと思います。

中村 ありがとうございます。いま藤原さんのオリジナリティという話が出ました。確かに戦争を総合的に研究することでは、これ以外にも、歴博では例えば、松木武彦先生のご研究もあるわけですが、藤原さんとしてはどういうふうに、ご自身の、あるいはご自身の世代のオリジナリティをお考えでしょうか。上の先生方とはここは違うんだと。

藤原 個人的には他の先生方との違いはあまり意識していませんが、戦争を体験している世代、身近に戦争体験者がいる世代、映像やアニメでしか戦争を知らない世代、では問題意識が大きく異なるのはやむを得ないかもしれません。

私はもちろん戦争を体験していませんし、何不自由ない子供時代を過ごして自分の興味あることとしかしない雑な性格でしたから、どちらかというと緻密な考古資料の積み上げを行う研究とは、若干異質だとは自覚しています。

世代の違いも大きいですが、研究というのはいくつかの諸事実をつなぎ合わせて、これまで言われていなかった新しいことを見つける、という発見の喜びがあります。ですから研究とは、これまでの世代とは異なった視点や解釈が必要な場合があるかもしれません。

中村 ありがとうございます。いろいろお聞きしたいことがあるんですけども、時間が過ぎてしまっているので、いったんこの鼎談はお開きにしたいと思います。引き続きお聞きになりたいことは質疑時間があるようですので、会場の皆さんからのお話も伺いたいと思います。

三上 お三人、どうもありがとうございます。せっかくだので、会場から質問や何かありましたら、いかがでしょうか。お願いします。

会場から 藤原先生にお伺いしたいんですけれども、話の中で戦場がどの範囲かという話がありました。弥生の戦いという倭国大乱が出てくると思いますが、倭国大乱の戦場はどのあたりで行われたのかということについてご研究されていないか。つまり、魏志倭人伝の作者の陳寿が倭国の範囲はどこを考えたのか。九州なのか、あるいは畿内も全部含めているのか、今日のお話を聞いていて、それによって邪馬台国の存在が見えてくるかなと思ったので、ぜひお伺いしたいと思います。

藤原 講演の際にもお話ししたように、考古学が不得意なところ、デメリットの一つは固有名詞が不明瞭なところです。誰しも古墳などに副葬されている人の名前を知りたいと思うのは当然なのですが、邪馬台国とか卑弥呼といった固有名詞を考古資料から実証するのはめっちゃ難しいです。

私としては意図的にそういった面を避け、考古学の方法論に基づいた研究を目指していましたが、総研大では古代史の仁藤先生から同じような質問を受けました。弥生時代の研究をするのであれば（学史で議論のある）「倭国大乱」は避けて通ることはできないだろう、というのです。そこで私なりに考えましたが、邪馬台国の範囲は北部九州のある定点まで範囲に含まれるのは確実でしょう。

武器や戦闘の痕跡から見ますと、武器の傷を受けた人骨（受傷人骨）は圧倒的に北部九州で見つけることが多いです。ですから、少なくとも人骨まで届くような深い傷が想定される戦いは北部九州一帯で行われた、といえるでしょう。とはいえ、そうした北部九州の受傷人骨は圧倒的に

弥生時代中期が多いので、邪馬台国の時代とは若干、時期がずれるかもしれませんが。これに加え、考古学的な事象は遺構の残りやすさの影響が大きいので、ご質問の邪馬台国時代の争いとは直接からんでいるのかどうかは微妙なところかと思っています。

会場から 分かりました。邪馬台国は話し出してしまったので申し訳なかつたですが、大乱の範囲と考えれば、やっぱり北部九州を中心に大きな戦いがあつたという認識でよろしいですか。

藤原 大きな戦いというのは、私の意味とは合わないかもしれないですけども、受傷人骨、殺傷人骨を見る限り、争いがたくさんあつたと証明できそうなのは北部九州一体であることは間違いないです。

会場から ありがとうございます。

三上 よろしいですか。お時間がすぎましたので、どうしてもという方。

そうしましたら、お三方、どうもありがとうございます。（拍手）

以上をもちまして総研大学院の公開講演会を終了いたします。先にご案内したとおり、アンケートは講堂から出られる際に備え付けのアンケート回収箱にご提出をお願いいたします。本日はご参加いただき誠にありがとうございました。（拍手）